

氏 名	福 井 勝 義 ふく い かつ よし
学 位 の 種 類	農 学 博 士
学 位 記 番 号	論 農 博 第 425 号
学位授与の日付	昭 和 48 年 1 月 23 日
学位授与の要件	学 位 規 則 第 5 条 第 2 項 該 当
学 位 論 文 題 目	エチオピアの栽培植物の呼称の分類とその史的考察

(主 査)
論文調査委員 教授 田中正武 教授 常脇恒一郎 教授 渡部忠世

論 文 内 容 の 要 旨

エチオピアは栽培植物の起原と変異のうえできわめて重要な中心地のひとつである。また、エチオピアにはきわめて多様な部族が分布し、それぞれ特異な農耕文化を構成している。本論文は、このような事実をふまえて、主要栽培植物に対する諸部族の呼称を分類し、その類縁関係を明らかにすることによって、エチオピアにおける栽培植物の起原あるいは伝播過程を探究しようとしたものである。

著者はエチオピアの主要作物である6つの穀類（コムギ・オオムギ・テフ・モロコシ・シコクビエ・トウモロコシ）および8つのマメ類（エンドウ・ヒヨコマメ・レンズマメ・ソラマメ・ササゲ・インゲマメ・コロハ・グラスピー）をとりあげ、上記の方法によって、それらの起原と伝播過程を究明した。

まず、コムギに関しては、従来のエジプトからエチオピアへの伝播説にたいして、西南アジアからイエメンを経てエチオピアに導入されたものであることを明らかにした。このほかにオオムギ・エンドウ・ヒヨコマメ・レンズマメ・ソラマメ・グラスピーもこの導入経路をとるものであることを立証している。

新大陸原産のトウモロコシおよびインゲマメに関しては、その呼称にエチオピア在来の栽培植物からの転用が多く、また由来を示す修飾語をつけた複合語を形成することから、それらの導入は比較的最近のことであり、少なくともエチオピアにおいてはブレ・コロンブス導入説を採用することは不適切であると結論している。

エチオピア固有の穀物であるテフに関しては、中北部の雑穀農耕文化圏と南部の根栽農耕文化圏のそれぞれに固有の呼称をもつことから、北部地域において一元的に栽培化されたという従来の説に対して、北部および南部の2地域において独立的に栽培化されたものであることを示唆している。

そのほか、多元的に発祥したと考えられているモロコシおよびコロハのエチオピアにおける栽培化にはクシティック系部族が関与しており、アフリカ型のシコクビエおよびササゲはスーダン地帯においてネグロイド系部族が栽培化し、移住の際にエチオピアにもたらしたことを明らかにしている。

論文審査の結果の要旨

栽培植物の起原および伝播過程の探究には、生物学的な立場からだけではなく、言語学、民族学、考古学などの諸分野からも考究することが望まれる。しかしながら、言語学および民族学的な立場からの研究は、その重要性が認められているにもかかわらず、ド・カンドル以来いずれも断片的なものでしかない。

著者は、栽培植物の起原および変異のうえで1つの重要な中心地であるエチオピアをとりあげ、諸部族による栽培植物の呼称の分類を試み、その類縁関係を植物学および民族学的資料と比較検討して、この地域における栽培植物の起原と伝播過程を追究した。

その結果から、コムギ、オオムギ、エンドウ、ヒヨコマメ、レンズマメおよびソラマメのエチオピアへの伝播に関しては、従来提唱されているエジプトからの伝播説に対して、著者は西南アジアからイエメンを経由した伝播経路がより蓋然性の高いことを指摘した。また、新大陸原産のトウモロコンおよびインゲンマメの導入時期に関しては、これまでコロンブス以前および以後の2説が対立しているが、著者は呼称の転用および複合語の形成は比較的新しい導入を示すものであるという原則にたって、両作物はエチオピアに比較的新しく導入されたものであることを示唆した。そのほか、エチオピア固有の栽培植物テフについては北部地域において一元的に起原したという従来の説を訂正し、北部および南部の2地域において独立的に栽培化されたものとした。

以上のように、本論文は諸部族による栽培植物の呼称の類縁関係の分析を中心とする新しい研究方法を導入することによって、栽培植物の起原の一大中心地であるエチオピアにおける主要作物の起原と伝播経路に関して多くの新知見をもたらしたものであって、栽培植物起原学の分野に寄与するところが大きい。

よって、本論文は農学博士の学位論文として価値あるものと認める。